
緋弾のエリア 転生者は謎の武偵

JOKER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア 転生者は謎の武偵

【コード】

N0320W

【作者名】

JOKER

【あらすじ】

神のミスで死んだ主人公は神にムリヤリ緋弾のアリアの世界に落とされた

第0話転生（前書き）

投稿、2つの掛け持ちですが宜しくお願いします

第0話転生

目を覚ますと真っ白の空間にいた

「此処は……どこだあ〜！」

「此処は現世とあの世の境目じゃ」

いきなり目の前にじじいが現れた

「じじいゆな」

「黙れじじい何故俺は此処にいる」

「死んだから」

「さらつと言っんじゃねー！」

「おぬしは銀行強盗に撃たれて死んだのだ」

「何故」

「ワシのミス」

「てめえ」

しばいたるか

「だから、ワシはおぬしを転生させてやる」

「マジ!？」

「ちなみに緋弾のアリアの世界ね、選択権は無い」

「ハアアアア俺、その小説一巻しか持ってねーよ」

「そこはどうかしろ」

じゃあ好きな願いを4つ叶えてやる」

「マジ!?!?じゃあ、まず一つ俺は狙撃科でSランクの武偵スナイプであること

二つ目は全ての銃を使いこなせること

三つ目は俺をアリア達と行動を共にするようになること

四つ目はおれの身体能力を高くしてくれ」

「構わん、ちなみにこれは原作ブレイクしても構わない」

「了解、さてと、名前はなんて名乗ろう

「……雨宮浩樹あまみやこうじでいいか」

「よし、では、逝ってこい」

俺の下に落とし穴が出てきた

「このくそじじい」

そして俺の第二の人生が始まった

第0・5話主人公設定（前書き）

「皆様からの感想、お待ちしております」

「何主人公が出てきてんだよ」

「別によくね」

「ダメ、絶対」

「薬物乱用防止ポスターじゃないんだから
それでは、本文をどうぞ」

「ごまかすな！」

第0・5話主人公設定

雨宮 浩樹（あまみや 浩樹）

本作品の主人公

身長 体重 年齢

170 46 17歳

容姿

ツリメで体型は普通、目の色は紫髪は首ぐらの長さで色は青、
両腕には黒いガンドレットをしている

特徴

全ての銃を使いこなせる、刀はあまり使わず、拳や蹴りで闘う
身体能力がとても高い、刀として使うのは、サバイバルナイフ

これから下は文字稼ぎ

++++
++++
++++
++++

第0・5話主人公設定（後書き）

次回、アリアとキングが出ます（これ確定）

第七話（前書き）

投稿

第巻話

「さてと、此処は、武偵高の男子寮だな」

俺は部屋を見て、壁に制服が有ることに気がついた

「ご丁寧に銃が・・・５つ!? こんなにいらねーだろ!?! しかもナイフは3つ!？」

まあ騒いでいてもしょうがない着替えるか」
パサッ

制服のポケットから手紙みたいのが出てきた

「なんだこれ」

『チャオっす

「初っぱなから他のマンガのネタを使うなー!」神だよ、まったく怒鳴ってないでよね、「怒鳴らせてんのは誰だよ」そんなときは深呼吸でもしろ、ちなみに銃に名前はない。

じゃ

「何の用があつたんだあああ!?!」

俺はとりあえず制服を着終わった

「5丁もいらねーし

はあ

よし行くか

確かあいつ等は体育倉庫だな

体育倉庫近く

「あ、危ない! 撃たれるわ!」

「アリアが撃たれるよりずっといいさ」

あの声はさしずめアリアとキンジか

「さて、いるUZIは1、2、3・・・20体!?! 多いな」
俺は茂みから出た

「助太刀しようか？」

俺が声をかけるとUZIの半分がこっちを見た

「危ない！」

アリアの声がよく聞こえるわ

俺は神から貰った銃（神曰くオリジナルで名前はないから俺がつけるらしい）を一丁取り出した

セグウェイが俺にUZIを撃ってきた。

「（狙いは、俺の頭に5発、心臓に5発、いいねえ〜ゾクゾクするよ）」俺はスローで見える弾をワザとギリギリでかわし、弾を相手の銃口に打ち込んだ

「チョロいチョロい」

体育倉庫を見るとキンジはベレッタをフルオートで撃っていた

かたずいたな

キンジ視点

「助太刀しようか」

いきなり一人の男が茂みから出てきた

そうするとセグウェイの半分が彼の方を見た

セグウェイは彼に銃弾を撃った、

「危ない！」

アリアの声が響く

彼は笑いながら弾をよけた。しかもギリギリで、あんな事ヒステリアモードの俺でも出来るかどうか

しかも避けながら銃弾を相手の銃口に入れた

それはヒステリアモードの俺でも出来るがとりあえずセグウェイを倒したし彼の所に行くか

ヒロキ視点

「大丈夫かい？」

キンジが声をかけてきた

「・・・遠山キンジ、神崎・H・アリア、無傷か？」
「なんとかな」

お前、何で俺達の名を知っている!？」

キンジは通常モードらしい

「ヒステリアモードを持つ男、遠山キンジとホームズ家の娘神崎・H・アリア」

「あんた、一体何者？」

アリアが睨みながら聞いてきた

「とりあえず、スナイプのSランク、とゆう事だけ言っておこう」

「Sランク!？」

綺麗にハモった

「じゃあね」

俺は自分のクラスに入った

二年Aクラス

HRで

「先生、あたしはアイツの隣に座りたい」

アイツは、アリアか、積極的だな

キンジの隣は峰 理子がいる、ここは

「良かったな、遠山キンジ、早速両手に花じゃないか」

当然、からかう

「違っ、てめえ、今朝の」

「そうそう、今朝はすごかったよね」 () () キンジがアリア

と体育倉庫にいて、キンジの台詞が「アリアが撃たれるよりずっと

いいさ」だったしね」 後「アリアを、守る」だっけ、いや」朝

から見ものだったよ。アツアツだねえ 結ばれる運命だとか？」

俺の言葉に周りがキヤアアアアなんて声出した時は驚いた

「何言ってるんだ(のよ)!!」
「ハモったから」

「息もピッタリだねえ」

バンバン

アリアが撃ってきた

ガキツ、チツ、パシツ

俺は2つのガンドレットに当てて素手で弾を取った

「いきなり撃つなんて危ないじゃないか」

周りが固まる

「嘘」「本当」

「お前一体何者なんだ!？」

「武偵だよ」

当たり前前事を答える

「何でそんな事出来るのか、だ」

「出来るから」

「わかったもういい」

放課後

自室

さて、風にあたるか

ピンポン

隣の部屋からか、このタイミングからすると隣はキンジジの部屋か

一連の会話を盗聴(これ、犯罪?)したあと
俺はコンビニに行った

コンビニ

そろそろかな

「もまん食べたいな」

キタキタ

「やあ、遠山夫妻、仲良く買い物かい？」

「夫妻じゃねー！」

「買ったもん買ったし帰るわ」

「そうそう、遠山キンジ、神崎・H・アリアと組め、お前の欲した（ほっ）真実がわかる」

「待て！」

「何？」

「何者なんだ、お前は」

「言うならば、死を知ったものじゃあね」

キンジ視点

「言うならば、死を知ったものじゃあね」

死を知ったもの？

何者なんだ、アイツ

ヒロキ視点

自室

「ごちそうさま」

俺はコンビニで買った弁当を食い終わり、寝た。

ちなみに部屋は俺一人

さてと明日は特に何もなし、キンジがアサルトに戻るのは明後日
のはず俺も行くかな

次回に続く

第貳話（前書き）

投稿しました

最近うまく書けない。

スランプかな？

第貳話

朝

「ふあゝあ」

俺は豪快に欠伸をした

ちなみに起きたのはお隣の所為

俺は喉を抑え声を変えて壁を叩いた

「すみませんもう少し静かにしてもらえませんか？」

『すみません』

キンジの謝る声が聞こえる。たゝのし

「さて、朝飯食ったし、行くか」

部屋の前

「早速腕組んじやって、よ！色男」

「違う！」

「とにかく行くか。」

お先〜」

その後アリア達は猫探しをしていた

俺は行かないのかって？

理由は簡単それは

……俺が猫アレルギーだからだ！

さて帰って寝よ

明日、放課後アサルトに行くか

翌日の放課後

アリアとキンジはと、いたいた

俺が二人の近くに行くと、三上とか言う奴が話かけてきた

「あ！お前、ヒロキか！？Aランクのアサルト、転科してくれるのか？」

「彘？」

何？

『おい、神、聞こえたら返事しろ』

『読んだ？』

『俺がアサルトAランクってどういう事だ？』

『それは、お詫びにスナイプ以外は全部Aランクにしといたから』
『なにいいいい』

マジかよ

「あんた、Aランクってどういう事」

げ、アリア

「知らん」

「あんたがAランクなんて信じない！勝負しなさい」

「拒否権は？」

「一応聞いてみる」

「無い！」

やっぱり

「わかった。勝負してやる。ルールは、お前が俺に攻撃を当てたらお前の勝ち。お前が行動不能になったら俺の勝ち。OK？」

「お前、本気か？」

キンジが聞いてきた。

「そうだ」

ザワザワ

ギャラリーが増えて、面白くなりそうだ。

「場所は？」

「この中よ」

アリアが指さしたのはちいさくもなく、大きくもない透明の箱
「いいぜ」

アサルト顧問の先生立ち会いの本勝負が始まった
バンバン

いきなりアリアが撃ってきた

俺は余裕でかわし、白い拳銃ヴァリスタ（今命名）をアリアに撃つた。武偵の制服は防弾チョッキ代わりな為決定打にはならない
「当たりなさいよ」

俺は弾を全てかわし、サバイバルナイフを三本右手の指に挟んだ。

「三刀流!？」

「行くぜ」

俺はナイフでアリアを（と言うかアリアの制服）を斬りまくった

「隙あり」

俺はアリアに手刀を喰らわせた

「あ」

「勝負あり……だ」

アリアは気絶した

数分後

「強い、負けたわ」

「悪いね、制服」

「気にしないで、此処はそのくらい当たり前だから
とりあえず、どうすつか

「おい、ヒロキ、ゲーセンでも寄って行かないか？」

「ゲーセンかあ、いいねえ」

「ねえ、『げーせん』って何？」

「ゲーセンとは、ゲームセンターの略だ」

「常識だろ？」

「帰国子女なんだから仕方ないじゃない。あたしも行く。今日は特

別に一緒に遊んであげるわ」

ナデナデ

「ヒロキ、何してるの?」

「あ、ワリ、つい」

無自覚

俺は、二人のじゃれあいを見ながら、ゲーセンに向かった

ゲームセンター

さてと、なにやるかな

「あれ? 遠山キンジ、神崎・H・アリアはどうした?」

「キンジで構わない。」

アリアなら、あそこだ。」

アリアはUFOキャッチャーの前にいた

「やりたいのか?」

「そ、そんな事……あるわよ」

折れた

「やってみるか」

「やり方わかんない」

「キンジ、神崎・H・アリア、俺は向こうにいる」

「わかった」

「アリアでいいわよ、わかったわ」

俺は、湾岸ミッドナイトをプレイした

「戻るか」

元の場所に戻ると、アリアとキンジがケータイにストラップを付け

ていた

「なんだそれ？

レオ、ポン？」

よくわからん

「とりあえず、今日は解散だな」

「また明日」

その後俺は部屋に戻り、寝た（当然風呂にも入る）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0320w/>

緋弾のARIA 転生者は謎の武偵

2011年10月9日15時22分発行